

九州麦作物語 (12)

誌名	農業技術
ISSN	03888479
著者名	吉田,美夫
発行元	農業技術協會
巻/号	28巻5号
掲載ページ	p. 227-227
発行年月	1973年5月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



九州麦作物語

—12 近世(安土・桃山～江戸時代)の麦作(その9)—

吉田美夫

5) 播種量 10a当たりの播種量は次のようである。すなわち、田法記では14.4l、会津農書では小麦9.0l、大麦12.6l、耕稼春秋では小麦16.2～21.6l、大麦32.4l(乾田)または37.8l(湿田)、対島の焼畑では5.4～14.4l、杵岐の牧畑では37.8lである。近世では、通常、小麦10.8l、大麦12.6lぐらいであったようである。なお、百姓伝記では厚まきを勧めており、農業自得では大麦4.4l、小麦3.4lとして、薄まきを勧めているが、おそくまくときには厚まきにするという。本朝食鑑では概して条まきを基調とすると述べている。

6) 施肥 百姓伝記では、麦の元肥として腐熟堆肥、土肥、人糞(ぶん)尿を用い、追肥として完熟厩(きゅう)肥を用いるといい、才蔵記では、麦の元肥として、灰、ほりこえ、干しいわし、厩肥を用い、追肥もたびたび施すという。寛政4年(1722年)、土佐安芸郡では、刈り草と土とを混ぜたもの、厩肥、すすけわら、人糞尿を麦に施したという。対島、日向、各地の阿蘇社領では焼畑の麦が主要農作物であったという。

会津農書では、麦の肥料として小便を用いるといい、耕稼春秋では、水田裏作に、「人糞尿、厩肥を元肥とし、小便を追肥として用いる。まれに干しいわしを用いる村もある。肥沃地にはだごえを多用すると、根が腐ったり、でき過ぎることもあるから、もっぱら、灰肥を用いて植えるようにする。一般的に、小麦跡の田はやせるし、小麦の稈が田に入ると毒であるから、ところによっては田に小麦を作らぬようにし、株は地際より刈り、田にある麦株はかき去るべきである」という。

若狭の国、伊藤正作著の農業蒙訓(天保年間、1830～1843年)によると、「麦田では、昨年(の)溝へ5月に入れ敷いた山草を畦の中心として、割った竹を伏せたように畦を中高にする。翌年5月には今年の溝へ山草を入れてすき合わせ、昨年5月に入れた山草は上にできるようにする」という。なお、北陸における大麦の肥料として、金沢付近では小便が多く、松任近辺では真糞が多いという。

追肥については、現代からみてかなり正確な見解がある。すなわち、農業自得には、「大麦、小麦への灰肥、小便の施用時期は、寒中限りという人もあるが、3月21日頃まではよい。その後(に)施用すると茎葉は繁茂するが、実りが悪く、つき減りが多い」とあり、農家備要

(大麦説)にも「麦は穂をまきにはらもうとする頃、はらみ肥として水糞を灌ぐと、穂が十分に抜き出て実りもよい」とある。

近世においては、山口宰判山口街のように、タバコには胡麻油かす、アイには菜種油かす、干しいわしなどの金肥を用いていたが、麦作には、一般的に、人糞尿、厩肥などの自給肥料を用いていた。しかし、麦作に対して金肥を施用していた例もある。農業全書、耕稼春秋、才蔵記、農業自得では、いわしや油かす類を用いると述べている。また、筆者の郷里の周防の国、徳地宰判佐波郡島地山畑村では麦作に油かす、ぬか、干しいわしなども施用していた。当時、金肥を多く施用する農家は、一応富裕な農家に限られていたといわれている。

7) 中耕・土入れ・除草など 本朝食鑑には、「麦の管理として、中耕、土入れ、土寄せを行なう」とあり、土入れについては、「麦が生えてからしきりに畦間をすき、土を集め、細土が麦の葉の上にあるようにする」との記載がある。才蔵記では、「冬(の)間に中耕し、春(に)なってさらに中耕、碎土して、土を入れ、草を取る」という。百姓伝記によると、「冬(から)春(に)かけて2～3回除草する必要がある。特に注意すべき雑草は、カナムグラ、ハコベ、ノミノツヅレ、ヂンバリである。管理は入念にやることが肝要であり、七遍削り、七遍肥やしをすると土ほど麦ありとさえいわれている。草麦のときにはほふくするように生育させる。また、霜柱の害を避けるためには、麦踏みを行ない、冬中に家ごみやすすを施すとよい」という。

麦の病害については、黒穂病が早くから目についていたようである。黒穂病のことを和名鈔では傘岐乃久呂美(麦の黒美)、漢名では麦奴といい、和漢三才図会では、「麦奴は麦穂のうれる頃黒かびがつくもの」といっている。しかし、農家はその防除法については知らなかったようである。

8) 刈り取り期 西川求林著の百姓囊には、「6月に入って、入梅にはまだ数日あるから、今幾日かして麦刈りをしようと思っている間に、雨季になって晴天もなく降り続き、ついに麦は乱れ朽ち果ててしまったことがたびたびある。これはみんな暦を頼んで油断したからである」とある。

9) 10a当たりの収量 才蔵記によると、大麦の平均収量は360lであり、会津農書には大麦で180l、小麦で108lとある。元禄年間に対島の焼畑では、あるときには81～324lまたあるときには27～108lであり、杵岐の牧畑における平年作は、大麦で99l、小麦で63lであるという。(九州農業試験場作物第2研究室)